

## 対称空間上の固有函数の境界値と積分表示

日本女子大 峰村 勝弘

### § 1. Helgason の結果と予想

周知の様は, S. Helgason は, 1970 年の Nice Congress で, 単位円内部  $D = \{z \in \mathbb{C} \mid |z| < 1\}$  にあつた Laplacian

$$\Delta = (1 - x^2 - y^2)^2 \left( \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} \right), \quad z = x + iy$$

の固有函数はすべて, 単位円周  $S = \{z \in \mathbb{C} \mid |z| = 1\}$  の上へ hyperfunction  $\varphi$  とある複素数  $\mu$  により, 次の Poisson 積分

$$\frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \left( \frac{1 - |z|^2}{|z - e^{i\theta}|^2} \right)^\mu \varphi(e^{i\theta}) d\theta$$

として得られることを示し, 一般の (non-compact) 対称空間での成立を予想した ([1]). 以下これを Helgason 予想と呼ぶことにする。まず上の定理を簡単に説明しよう。

Lie group  $G = SU(1, 1) = \left\{ g = \begin{pmatrix} \alpha & \beta \\ \bar{\beta} & \bar{\alpha} \end{pmatrix} \mid \alpha, \beta \in \mathbb{C}, |\alpha|^2 - |\beta|^2 = 1 \right\}$  の  $P_1(\mathbb{C}) = \mathbb{C} \cup \{\infty\}$  上の作用を

$$g(z) = (\alpha z + \beta) / (\bar{\beta} z + \bar{\alpha}), \quad z \in P_1(\mathbb{C})$$

により定まる。  $K = \left\{ \begin{pmatrix} e^{i\theta} & \\ & e^{-i\theta} \end{pmatrix} \mid \theta \in \mathbb{R} \right\}$  とおくと、 $K$  は  $0 \in D$  の isotropy subgroup と存在する。  $G$  は  $D$  に推移的に作用するから、  $G/K \ni gK \mapsto g(0) \in D$  に同型と存在する。 以下、  $G/K$  と  $D$  を同一視する。  $G$  の subgroups  $M, A, N$  を

$$M = \left\{ \pm \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \right\}, \quad A = \left\{ \begin{pmatrix} \cosh t & \sinh t \\ \sinh t & \cosh t \end{pmatrix} \mid t \in \mathbb{R} \right\}, \quad N = \left\{ \begin{pmatrix} 1+i\xi & -i\xi \\ -i\xi & 1-i\xi \end{pmatrix} \mid \xi \in \mathbb{R} \right\}$$

で定義し、  $P = MAN$  とおく。  $P$  は  $1 \in S$  の isotropy subgroup と存在する。 従って、  $G/P \cong S$  と存在する。  $S$  上の hyperfunction 全体を  $\mathcal{B}(S)$  と書く。

次に、  $S$  上の real-analytic functions 全体を  $\mathcal{A}(S)$  で表わす。  $U$  を、  $S$  を含む  $\mathbb{C}$  にあける開集合とし、  $H(U)$  を  $U$  上の holomorphic functions 全体のなす空間とし、  $U$  内の compact sets 上の一様収束位相を入れた top. vector space を表わす。  $\mathcal{A}(S)$  の strong dual を  $\mathcal{A}(S)'$  とおくと

$$\mathcal{B}(S) \cong \mathcal{A}(S)'$$

が成立する。 2 の同型対応については後に述べる。

2.2  $\varphi \in \mathcal{A}(S)$  を一つとり固定しよう。 任意の  $\psi \in \mathcal{A}(S)$  に対して

$$\psi(\varphi) = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \varphi(e^{i\theta}) \psi(e^{i\theta}) d\theta$$

とおくと、  $\mathcal{A}(S) \ni \varphi \mapsto \psi(\varphi) \in \mathbb{C}$  は  $\mathcal{A}(S)'$  に属する。 従って 以下は 2 の対応を  $\mathcal{A}(S) \subset \mathcal{A}(S)'$  とみても可い。

$n \in \mathbb{Z}$  に対し  $\varphi_n \in \mathcal{A}(S)$  を

$$\varphi_n(e^{i\theta}) = e^{in\theta}$$

と定める。  $\varphi$  とする任意の  $\varphi \in \mathcal{A}(S)'$  は  $\mathcal{A}(S)'$  の位相で

$$\varphi = \sum_{n \in \mathbb{Z}} a_n \varphi_n$$

と展開される。  $\varphi$  である  $a_n$  の満すべき条件は

$$\sum_{n \in \mathbb{Z}} |a_n| r^{|n|} < \infty \quad (1 > r > 0)$$

$D$  上の  $\mathbb{C}$ -不変な differential operators を  $\mathcal{D}(D)$  と書くことにすれば,  $\Delta \in \mathcal{D}(D)$  であり,  $\mathcal{D}(D)$  は  $\Delta$  により生成される。 すなわち,  $\mathcal{D}(D) \cong \mathbb{C}[\Delta]$ .  $\lambda \in \mathbb{C}$  に対し

$$\mathcal{A}(D, \lambda) = \{ u \in \mathcal{B}(D) \mid \Delta u = \lambda(u+1)u \}$$

とある。  $\varphi$  である  $\mathcal{B}(D)$  は  $D$  上の hyperfunctions 全体のなす空間である。  $\Delta$  は elliptic であるから,  $\mathcal{A}(D, \lambda)$  の元は real analytic である。

$$P(z, e^{i\theta}) = \frac{1 - |z|^2}{|z - e^{i\theta}|^2}$$

とある。 任意に  $\theta$  を固定し  $\varphi_\lambda(z, e^{i\theta}) = P(z, e^{i\theta})^{\lambda+1}$

は  $\mathcal{A}(D, \lambda)$  に属するということを容易に確かめられる。 従って  $\varphi \in \mathcal{A}(S)'$

に対し  $D$  上の函数  $P_\lambda(\varphi)$  を

$$(P_\lambda(\varphi))(z) = \varphi(P_\lambda(z, \cdot))$$

と定義する。  $P_\lambda(\varphi) \in \mathcal{A}(D, \lambda)$  と存在。

すなわち  $u \in \mathcal{A}(D, \lambda)$ ,  $g \in \mathcal{G}$  に対し

$$(\pi(g)u)(z) = u(g^{-1}(z)) \quad , \quad z \in D$$

とある。これは:  $\pi$  は  $\mathcal{A}(D, \lambda)$  は  $G$ -module と見做す。 -  $\bar{z}$

$\varphi \in \mathcal{B}(S)$  には  $\pi$

$$(\pi_\lambda(g)\varphi)(\omega) = |\bar{\alpha}\omega - \beta|^{2\lambda} \varphi(g^{-1}(\omega)),$$

$$\omega \in S, \quad g = \begin{pmatrix} \alpha & \beta \\ \bar{\beta} & \bar{\alpha} \end{pmatrix}$$

とある。これは:  $\pi_\lambda$  は  $\mathcal{B}(S)$  は  $G$ -module と見做す,  $\mathcal{P}_\lambda$  は

$\mathcal{B}(S)$  から  $\mathcal{A}(D, \lambda)$  への  $G$ -homomorphism と見做す。  $\mathcal{P}_\lambda$  は

と見做す。

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{B}(S) & \xrightarrow{\mathcal{P}_\lambda} & \mathcal{A}(D, \lambda) \\ \pi_\lambda(g) \downarrow & & \pi(g) \downarrow \\ \mathcal{B}(S) & \xrightarrow{\mathcal{P}_\lambda} & \mathcal{A}(D, \lambda) \end{array} .$$

2.  $\varphi_n \in \mathcal{A}(S)$  には  $f_\lambda^n = \mathcal{P}_\lambda(\varphi_n)$  と見做す。  $\mathcal{P}_\lambda$  は

$$\mathcal{A}(S) \ni \varphi = \sum_{n \in \mathbb{Z}} a_n \varphi_n \quad \text{には}$$

$$\mathcal{P}_\lambda(\varphi) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} a_n f_\lambda^n$$

と見做す。  $f_\lambda^n$  には  $f_\lambda^n(z) = e^{in\theta} f_\lambda^n(r)$  と見做す。

$$\begin{cases} f_\lambda^n(e^{i\theta}z) = e^{in\theta} f_\lambda^n(z) \\ f_\lambda^n(r) = (1-r^2)^{\lambda+1} r^{|n|} \frac{\Gamma(|n|+\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(|n|+1)} \end{cases}$$

$$\times F(\lambda+1, |n|+\lambda+1, |n|+1; r^2) \quad (0 \leq r < 1)$$

と見做す。  $\mathcal{A}(D, \lambda)$  には  $f \in \mathcal{A}(D, \lambda)$  は

$$f(e^{i\theta}z) = \frac{1}{2\pi} \sum_{n \in \mathbb{Z}} e^{in\theta} \int_0^{2\pi} f(e^{i\theta}z) e^{-in\theta} d\theta$$

と展開されるが、 $\lambda \notin -\mathbb{N}$  ならば  $\frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} f(e^{i\theta}z) e^{-in\theta} d\theta$  は  $f_\lambda^n$  の scalar 係数に等しいとわかる。従って

$$f = \sum_{n \in \mathbb{Z}} b_n f_\lambda^n \quad (b_n \in \mathbb{C})$$

とこの展開が得られる。ここで、元の  $f_\lambda^n$  の具体的な形を見ることが出来る。ここで、 $b_n$  は  $S$  上の hyperfunction の  $\varphi_n$  による展開の係数の満たす条件

$$(1) \quad \sum_{n \in \mathbb{Z}} |b_n| r^{|n|} < \infty \quad (1 > r \geq 0)$$

を満足するもの。  $\varphi = \sum b_n \varphi_n$  と  $r_1 < r < \varphi \in \mathcal{O}(S)$  であり、

$P_\lambda(\varphi) = f$  と等しいと容易にわかる。故に、 $\lambda \notin -\mathbb{N}$  ならば  $P_\lambda$  が全射であることが結論される。

実は、この方法で、Lorentz group の場合は全く同様である。同じ定理が証明出来るのである。  $SU(n, 1)$ ,  $Sp(n, 1)$ ,  $FII$  などは弱形の定理しか証明出来る。またこの方法は  $f_\lambda^n$  の explicit 形を必要としない。対称空間の rank が 2 以上の場合は実行不可能である。

## § 2. 固有函数の境界値

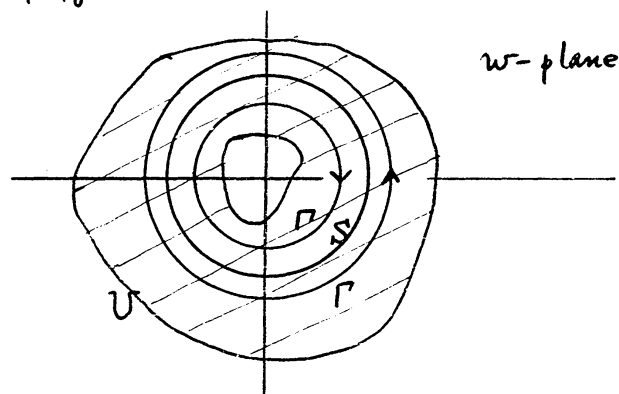
この § では、§ 1 とは見方を變えて、同じ問題を考へてみる。まず § 1 での  $\beta(S) \cong \alpha(S)'$  の同型対応について述べよう。(詳しくは [ ] )。定義より

$$\beta(S) = \lim_{U \supset S} H(U-S)/H(U)$$

である。  $F \in H(U-S)$  の定まる  $\beta(S)$  の元  $\varphi$  を  $\varphi = [F, U]$  あるいは  $\varphi(w) = [F(w)]_{w=w}$  として記す。  $\varphi$  の  $S$  上の積分  $\int_S \varphi(w) dw$

$$\int_S \varphi(w) dw = -\frac{1}{2\pi i} \int_{\Gamma} F(w) \frac{dw}{w}$$

で定まる。但し  $\Gamma$  は



で与えられる積分路である。積分は代表元  $F$  と積分路  $\Gamma$  の取り方に依る。  $\psi \in \alpha(S)$  と  $\varphi \in \beta(S)$  に対して、ある  $U \supset S$ ,  $F \in H(U-S)$  が存在して、  $\varphi = [F]$ ,  $\psi \in H(U)$  とする。  $\xi = \zeta$ ,  $[\psi(w)F(w)]$  により  $\psi$  と  $\varphi$  の積  $\psi\varphi$  を定義する。この積により  $\beta(S)$  は  $\alpha(S)$ -module とする。  $U \supset S$  に対して

$U_0 = \{w \in U \mid |w| < 1\}$ ,  $U_\infty = \{w \in U \mid |w| > 1\}$  とおく。

$\varepsilon_0, \varepsilon_\infty \in H(\mathbb{C}-S)$  を  $|w| < 1$  のとき  $\varepsilon_0(w) = 1$ ,  $\varepsilon_\infty(w) = 0$  とし

$|w| > 1$  のとき  $\varepsilon_0(w) = 0$ ,  $\varepsilon_\infty(w) = -1$  とし定義する。

$\psi \in A(S)$  に対し  $\psi \in H(U)$  なる  $\psi$  をとり,  $G \in H(U-S)$  を

$G(w) = \varepsilon_0(w)\psi(w)$  で定めれば  $\psi \mapsto [G]$  は  $A(S)$  から

$B(S)$  への injection を与える。以下  $F = \psi$  に対応して  $A(S) \subset B(S)$

と考へる。  $\psi \in H(D)$  に対し  $[\varepsilon_0\psi] = [\varepsilon_\infty\psi]$  であることは

注意する。

また  $\varphi \in B(S)$  と  $\psi \in A(S)$  に対し pairing  $(\varphi, \psi)$  を

$$(\varphi, \psi) = \int_S (\varphi\psi)(w) dw$$

で定める。この pairing により  $\varphi$  は  $A(S)'$  の元とみれば,

$$B(S) \cong A(S)'$$

が得られる。容易に

$$\begin{array}{c} B(S) \cong A(S)' \\ \uparrow \quad \curvearrowright \\ A(S) \end{array}$$

が可換であることがわかる。従って、上の同一視により  $\varphi \in B(S)$

の Poisson 積分は

$$(\mathcal{P}_S(\varphi))(z) = \int_S P_\lambda(z, w) \varphi(w) dw$$

$$= (\varphi(w), P_\lambda(z, w))$$

で与えられる。

次に,  $\varphi \in \mathcal{B}(S)$  の Poisson 積分を  $\varphi$  の定義函数を使って,  
具体的に書き下してみよう。

$$P(z, w) = \frac{1 - |z|^2}{|z - w|^2}$$

は  $w \in S$  に関して real analytic である。  $w^1 = \bar{w}$  である  
から

$$\frac{1 - |z|^2}{|z - w|^2} = \frac{w}{w - z} - \frac{w}{w - \frac{1}{\bar{z}}}$$

と書き直せる。  $\zeta = z$

$$Q(z, w) = \frac{w}{w - z} - \frac{w}{w - \frac{1}{\bar{z}}}$$

とすれば,  $z \in D$  を fix すると  $Q(z, w)$  は  $S$  の近傍で正  
則で,  $Q(z, w) = P(z, w)$  ( $w \in S$ ) を満たす。

$Q(z, w) = P(z, w) > 0$  であるから  $Q_\lambda(z, w) = Q(z, w)^{\lambda+1}$

が  $S$  の近傍で正則で,  $Q_\lambda(z, w) = P_\lambda(z, w)$  なるように定  
義出来る。従って  $\varphi = [F, U] \in \mathcal{B}(S)$  に対して,  $\Gamma$  を次の  
様に与えれば

$$(P_\lambda(\varphi))(z) = -\frac{1}{2\pi i} \int_\Gamma Q_\lambda(z, w) F(w) \frac{dw}{w}.$$



$$\text{例} \quad \mathcal{P}_0(\varphi_n) \quad \varphi_n(e^{i\theta}) = e^{in\theta}$$

①  $n > 0$  の場合

$$\varphi_n(\omega) = [\varepsilon_0(\omega) \omega^n]_{\omega=\omega}$$

$$\begin{aligned} (\mathcal{P}_0(\varphi_n))(z) &= -\frac{1}{2\pi i} \int_{\Gamma} \left( \frac{w}{w-z} - \frac{w}{w-\frac{1}{z}} \right) \varepsilon_0(w) \omega^n \frac{dw}{w} \\ &= \frac{1}{2\pi i} \int_{\left(\frac{z}{\circlearrowleft}\right)} \frac{w^n}{w-z} dw = z^n \end{aligned}$$

②  $n < 0$  の場合

$$\varphi_n(\omega) = [\varepsilon_0(\omega) \omega^{-|n|}]_{\omega=\omega} = [\varepsilon_\infty(\omega) \omega^{-|n|}]_{\omega=\omega}$$

$$\begin{aligned} (\mathcal{P}_0(\varphi_n))(z) &= -\frac{1}{2\pi i} \int_{\Gamma} \left( \frac{w}{w-z} - \frac{w}{w-\frac{1}{z}} \right) \varepsilon_\infty(w) \omega^{-|n|} \frac{dw}{w} \\ &= \frac{1}{2\pi i} \int_{\left(\frac{z}{\circlearrowleft}\right)} \left( \frac{w}{w-z} - \frac{w}{w-\frac{1}{z}} \right) w^{-|n|} \frac{dw}{w} \\ &= -\frac{1}{2\pi i} \int_{\left(\frac{1}{z}\right)} \left( \frac{w}{w-z} - \frac{w}{w-\frac{1}{z}} \right) w^{-|n|} \frac{dw}{w} \\ &= \left( \frac{1}{z} \right)^{-|n|} = \bar{z}^{|n|} \end{aligned}$$

$$\text{従って} \quad \mathcal{P}_0(\varphi_n) = \begin{cases} z^n & n \geq 0 \\ \bar{z}^{|n|} & n < 0 \end{cases}$$

この結果は確かに  $f_\lambda^n(z)$  の  $\lambda = 0$  の場合と一致している。

②.  $f_\lambda^n = \mathcal{P}_\lambda(\varphi_n)$  の hyperfunction としての境界値が次の様

1-12 取子 = とか出て来子。超幾何函数 = 対子 Gauss の変換  
公式 ( $\alpha + \beta - \gamma \neq 0, \pm 1, \pm 2, \dots$  と子子。)

$$\begin{aligned} & \frac{\Gamma(\alpha)\Gamma(\beta)}{\Gamma(\gamma)} F(\alpha, \beta, \gamma; z) \\ &= \frac{\Gamma(\alpha)\Gamma(\beta)}{\Gamma(\gamma-\alpha)\Gamma(\gamma-\beta)} F(\alpha, \beta, \alpha+\beta-\gamma+1; 1-z) \\ &+ \Gamma(\alpha+\beta-\gamma)(1-z)^{\gamma-\alpha-\beta} F(\gamma-\alpha, \gamma-\beta, \gamma-\alpha-\beta+1; 1-z) \end{aligned}$$

1-13 y

$$\begin{aligned} f_{\lambda}^{\eta}(x) &= (1-x^2)^{\lambda+1} x^{|\eta|} \frac{\Gamma(|\eta|+\lambda+1)\Gamma(-2\lambda-1)}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(|\eta|-\lambda)\Gamma(-\lambda)} \\ &\quad \times F(\lambda+1, |\eta|+\lambda+1, 2\lambda+2; 1-x^2) \\ &+ (1-x^2)^{-\lambda} x^{|\eta|} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} F(|\eta|-\lambda, -\lambda, -2\lambda; 1-x^2) \end{aligned}$$

( $-2\lambda-1 \neq 0, \pm 1, \pm 2, \dots$ )

と表わす子子。 = =  $z \in D - \{0\}$  に 次 の 様 子 parameter  $\lambda$  子  
子。

$$D - \{0\} \approx \mathbb{R} \times (0, 1)$$

$$\Downarrow \qquad \qquad \Downarrow$$

$$\mathbb{R}/k - \{ek\} \approx \mathbb{R}/M \times (0, 1)$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad y = e^{-\alpha(\log a)}$$

$$kaK \longleftrightarrow (kM, y)$$

容易に  $D \ni z = x e^{i\theta}$  と子子  $x = (1-y)/(1+y)$  と子子 = と  
か子子子。 従子子

$$f_{\lambda}^n(x) = y^{\lambda+1} \left(\frac{2}{1+y}\right)^{2\lambda+2} \left(\frac{1-y}{1+y}\right)^{|n|} \frac{\Gamma(|n|+\lambda+1)\Gamma(-2\lambda-1)}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(|n|-\lambda)\Gamma(-\lambda)} \\ \times F(\lambda+1, |n|+\lambda+1, 2\lambda+2; \frac{4y}{(1+y)^2}) \\ + y^{-\lambda} \left(\frac{2}{1+y}\right)^{-2\lambda} \left(\frac{1-y}{1+y}\right)^{|n|} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} F(|n|-\lambda, -\lambda, -2\lambda; \frac{4y}{(1+y)^2})$$

$= z''$

$$\varphi(e^{i\theta}, y) = \left(\frac{2}{1+y}\right)^{2\lambda+2} \left(\frac{1-y}{1+y}\right)^{|n|} \frac{\Gamma(|n|+\lambda+1)\Gamma(-2\lambda-1)}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(|n|-\lambda)\Gamma(-\lambda)} \\ \times F(\lambda+1, |n|+\lambda+1, 2\lambda+2; \frac{4y}{(1+y)^2}) \times e^{in\theta}$$

$$\psi(e^{i\theta}, y) = \left(\frac{2}{1+y}\right)^{-2\lambda} \left(\frac{1-y}{1+y}\right)^{|n|} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} \\ \times F(|n|-\lambda, -\lambda, -2\lambda; \frac{4y}{(1+y)^2}) \times e^{in\theta}$$

とある,  $f_{\lambda}^n(re^{i\theta}) = e^{in\theta} f_{\lambda}^n(x)$  には注意が必要;

$$f_{\lambda}^n(re^{i\theta}) = \varphi(e^{i\theta}, y) y^{\lambda+1} + \psi(e^{i\theta}, y) y^{-\lambda}$$

から得られる。  $z = z''$   $\varphi(e^{i\theta}, 0)$ ,  $\psi(e^{i\theta}, 0)$  に意味がある。

$z = z''$   $\varphi(\omega) = \varphi(\omega, 0)$ ,  $\psi(\omega) = \psi(\omega, 0)$  とある。

$$\beta_{\lambda}(f_{\lambda}^n) = \varphi$$

$$\beta_{-(\lambda+1)}(f_{\lambda}^n) = \psi$$

と定まる。直ちに

$$\int \beta_{\lambda}(f_{\lambda}^n) = 2^{-2\lambda} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} \varphi_n$$

$$(2) \quad \left\{ \beta_{-(\lambda+1)}(f)_\lambda = 2^{2\lambda+2} \frac{\Gamma(-2\lambda-1)}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(-\lambda)} \cdot \frac{\Gamma(1n+1+\lambda+1)}{\Gamma(1n-\lambda)} \varphi_n \right.$$

がわかる。一方任意の  $f \in A(D, \lambda)$  は

$$f = \sum_{n \in \mathbb{Z}} b_n f_\lambda^n$$

と展開出来る。  $\Rightarrow \Rightarrow$

$$F(w) = \varepsilon_0(w) \sum_{n \geq 0} b_n w^n + \varepsilon_\infty(w) \sum_{n < 0} b_n w^n$$

$$G(w) = \varepsilon_0(w) \sum_{n \geq 0} b_n \frac{\Gamma(1n+1+\lambda+1)}{\Gamma(1n-\lambda)} w^n \\ + \varepsilon_\infty(w) \sum_{n < 0} b_n \frac{\Gamma(1n+1+\lambda+1)}{\Gamma(1n-\lambda)} w^n$$

とあると、 $\{b_n\}$  の (1) の条件を満足 (  $\Rightarrow \Rightarrow$  ) であるから  $F, G$  は  $H(\mathbb{C}-S)$  に属するものである。  $\Rightarrow \Rightarrow$

$$\beta_\lambda(f) = 2^{-2\lambda} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} [F(w)]_{w=0}$$

$$\beta_{-(\lambda+1)}(f) = 2^{2\lambda+2} \frac{\Gamma(-2\lambda-1)}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(-\lambda)} [G(w)]_{w=\infty}$$

とある  $\Rightarrow \Rightarrow A(D, \lambda)$  の  $\beta(S)$  への map.  $\beta_\lambda$  と  $\beta_{-(\lambda+1)}$  は定義  
 する。明らかなら (2) の拡張は存在する。

$\Rightarrow \Rightarrow$  Poisson kernel の  $\omega=1$  の場合。  $\Rightarrow \Rightarrow$   $P(z, 1)$  に対

2  $\beta_\lambda(P(z, 1))$  を求める。まず、 $w=1$  における delta function は  $\delta = \left[ \frac{1}{1-w} \right]$  である。注意しておく。

$$f_\lambda^n(z) = P_\lambda(\varphi_n) = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} P_\lambda(z, e^{i\theta}) e^{in\theta} d\theta$$

より

$$P_\lambda(z, e^{i\theta}) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} e^{-in\theta} f_\lambda^n(z)$$

を得る。従って  $\theta=0$  と

$$P_\lambda(z, 1) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} f_\lambda^n(z)$$

とある。  $\beta_\lambda(P_\lambda(z, 1))$  の定義函数  $F$  は

$$\begin{aligned} F(w) &= 2^{-2\lambda} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} \left\{ \epsilon_0(w) \sum_{n \geq 0} w^n + \epsilon_\infty(w) \sum_{n > 0} w^{-n} \right\} \\ &= 2^{-2\lambda} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} \left\{ \epsilon_0(w) \frac{1}{1-w} + \epsilon_\infty(w) \frac{1}{w-1} \right\} \\ &= 2^{-2\lambda} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} \cdot \frac{1}{1-w} \end{aligned}$$

とある。故に  $\beta_\lambda(P_\lambda(z, 1)) = 2^{-2\lambda} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} \delta$  である。

$\beta_\lambda$  は省略するが、 $\beta_\lambda, \beta_{-(\lambda+1)}$  は  $\beta = \alpha(\mathcal{D}, \lambda)$  の  $\beta(S)$  の  $\mathbb{C}$ -homomorphism である。すなわち

$$\begin{array}{ccc}
 A(\mathcal{D}, \lambda) \xrightarrow{\beta_\lambda} B(S) & & A(\mathcal{D}, \lambda) \xrightarrow{\beta_{-(\lambda+1)}} B(S) \\
 \pi(\varphi) \downarrow & \pi_\lambda(\varphi) \downarrow & \pi(\varphi) \downarrow & \pi_{-(\lambda+1)}(\varphi) \downarrow \\
 A(\mathcal{D}, \lambda) \xrightarrow{\beta_\lambda} B(S) & & A(\mathcal{D}, \lambda) \xrightarrow{\beta_{-(\lambda+1)}} B(S)
 \end{array}$$

は互に可換である。  $\Rightarrow a = b$  を認めれば

$$\beta_\lambda P_\lambda = 2^{-2\lambda} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2} \text{id.}$$

(id. は恒等作用素) と存在  $\Rightarrow$   $\lambda$  のべき乗に  $(2^{-2\lambda})$  が導出される。

$$\begin{aligned}
 \beta_\lambda P_\lambda(\varphi)(\omega) &= \beta_\lambda \int_S P_\lambda(z, \omega_0) \varphi(\omega_0) d\omega_0 \\
 &= \int_S \beta_\lambda P_\lambda(z, \omega_0) \varphi(\omega_0) d\omega_0 \\
 &= \int_S \beta_\lambda P_\lambda(\omega_0^T z, 1) \varphi(\omega_0) d\omega_0 \\
 &= \int_S \delta(\omega_0^T \omega) \varphi(\omega_0) d\omega_0 = \varphi(\omega)
 \end{aligned}$$

2.2.  $\Rightarrow$  " Harish-Chandra の球函数の理論を援用する  $\Rightarrow$   $\beta_\lambda, \beta_{-(\lambda+1)}$  は injective である  $\Rightarrow$   $\lambda$  のべき乗に容易に導出される。(但し  $\lambda \notin \mathbb{Z}$  は仮定して置く。) それを示そう。

$u \in A(\mathcal{D}, \lambda)$  とし  $u \neq 0, \beta_\lambda(u) = 0$  とし矛盾を導く。  $\beta_\lambda$  の  $\mathbb{C}$ -hom. である  $\Rightarrow$   $\lambda$  のべき乗に  $u(0) = 1$  と仮定してよい。

$\Rightarrow \tau$ .  $u_k(z) = \int_K u(k(z)) dk$  とおく。明らかに  $u_k(0) = 1$  である。従って Harish-Chandra の球函数の理論より

$$u_k = P_\lambda(z)$$

と表わされる。従って  $\beta_\lambda(u_k) = z^{-2\lambda} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2}$  が得られるが、一方  $\tau$  は

$$\beta(u_k) = \int_K \pi_\lambda(k) \beta_\lambda(u) dk = \int_K 0 dk = 0$$

であるので矛盾。

$\Rightarrow \tau$ ,  $z^{-2\lambda} \frac{\Gamma(2\lambda+1)}{\Gamma(\lambda+1)^2}$  は Harish-Chandra の  $c$ -function を用いて、 $C(-\sqrt{1}(\lambda+\frac{1}{2})\alpha)$  と表わされることにも注意しておく。

2.2. 以上の  $\beta_\lambda$  の性質をまとめると

- (3)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{(i)} \quad \lambda \notin \frac{1}{2}\mathbb{Z} \text{ のとき } \beta_\lambda: A(\mathcal{D}, \lambda) \rightarrow B(S) \text{ の定義} \\ \text{出来ず, } G\text{-homomorphism} \\ \text{(ii)} \quad \beta_\lambda \circ P_\lambda = C(-\sqrt{1}(\lambda+\frac{1}{2})\alpha) \cdot i\lambda \\ \text{(iii)} \quad \beta_\lambda \text{ は injective} \end{array} \right.$

(3) から、 $\lambda \notin \frac{1}{2}\mathbb{Z}$  のとき  $P_\lambda$  が surjective であることがこの形の

$$\varphi = C(-\sqrt{1}(\lambda+\frac{1}{2})\alpha)^{-1} \beta_\lambda(u)$$

とある。可なり  $\beta_\lambda \mathcal{P}_\lambda(\varphi) = C(-\sqrt{-1}(\lambda + \frac{1}{2})\alpha) \varphi = \beta_\lambda(u)$ .  $\beta_\lambda$  は injective であるから  $\mathcal{P}_\lambda(\varphi) = u$  と存在する。

最後に、 $\lambda=0$  の場合の  $\beta_{-1} \mathcal{P}_0$  について述べておく。  $\beta_{-1}$  は  $\mathbb{C}$  と  $\mathbb{C}$  と定義されているが、次のように  $\beta_{-1} \mathcal{P}_0$  に意味がつけられる。  $\beta_{-(\lambda+1)} \mathcal{P}_\lambda$  を考えよう。

$$\beta_{-(\lambda+1)} \mathcal{P}_\lambda : \varphi_n \mapsto f_\lambda^n \mapsto 2^{\frac{2\lambda+2}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(\lambda)}} \frac{\Gamma(-2\lambda-1)}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(\lambda)} \frac{\Gamma(|n|+\lambda+1)}{\Gamma(|n|-\lambda)} \varphi_n$$

$\lambda \rightarrow 0$  とし、任意の  $n \in \mathbb{Z}$  に対して

$$2^{\frac{2\lambda+2}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(\lambda)}} \frac{\Gamma(-2\lambda-1)}{\Gamma(\lambda+1)\Gamma(\lambda)} \frac{\Gamma(|n|+\lambda+1)}{\Gamma(|n|-\lambda)} \rightarrow -2|n|$$

と存在する。  $\mathbb{C} = \mathbb{C}$   $\beta_{-1} \mathcal{P}_0(\varphi_n) = -2|n| \varphi_n$  と考えよう。

$\beta_{-(\lambda+1)} \mathcal{P}_\lambda$  は  $\mathcal{B}(S)$  から  $\mathcal{B}(S)$  への  $\mathbb{C}$ -hom. である。  $\beta_{-1} \mathcal{P}_0$  も  $\mathcal{B}(S)$  から  $\mathcal{B}(S)$  への  $\mathbb{C}$ -hom. であり、互いに commuting operator である。  $\mathbb{C}$  上、  $D$  は  $e^{i\theta}$  の各種  $(e^{i\theta}, y)$  を  $\lambda$  の関数と見做す。可なり容易に、任意の  $n \in \mathbb{Z}$  に対して

$$n \geq 0 \text{ ならば } \left( \frac{\partial z^n}{\partial y} \right)_{y=0} = -2|n| e^{in\theta}$$

$$n < 0 \text{ ならば } \left( \frac{\partial \bar{z}^{|n|}}{\partial y} \right)_{y=0} = -2|n| e^{in\theta}$$

と存在する。  $\mathbb{C}$  上の  $\mathbb{C}$  である。 前記述のとおり



$$z^n = p_0(\varphi_n) \quad (n \geq 0), \quad \bar{z}^{|n|} = p_0(\varphi_n) \quad (n < 0)$$

であるから

$$z^n|_{y=0} = \varphi_n \quad (n \geq 0), \quad \bar{z}^{|n|}|_{y=0} = \varphi_n \quad (n < 0)$$

に注意すれば  $\beta_1 p_0$  は  $z^n, \bar{z}^{|n|}$  の Dirichlet data に対して Neumann data を対応させていることがわかる。

### §3. 一般の対称空間における Helgason 予想の肯定的解決

§2 において、任意の固有函数に対して、その境界値をとる写像が構成された。そこで、固有函数の球函数展開を用いた。しかし実は一般の (higher rank の) 対称空間において各不変微分作用素が Martin 境界に関して確定対蹯型であることより、generic な固有値に属しては (球函数展開することにより) 固有函数の境界値をとる写像が構成され、§2 の (3) の (i) ~ (iii) と同様の性質を持つことが示され、従って積分表示出来ることが証明される。これらに属しては 岡本-嵯峨村 [5],  $SL(3, \mathbb{R})$  に属しては 大島 [6], 一般の対称空間での完全な証明は [3], 写像  $\beta$  の構成については (確定対蹯型微分方程式の理論について) 大島 [7], 柏原-大島 [2] を参照された。

## 文献

- [1] Helgason, S. Group Representations and Symmetric Spaces, Actes, Congrès intern. Math., 1970. Tome 2, 313-319.
- [2] 柏原正樹-大島利雄, The boundary value problem for the systems of differential equations with regular singularity, to appear.
- [3] 柏原正樹-木幡篤孝-峰村勝弘-岡本清郷-大島利雄-田中誠, Eigenfunctions of invariant differential operators on a symmetric space, to appear.
- [4] 峰村勝弘, 対称空間上の不変微分作用素の同時固有函数, 数理研講究録 "超函数と線型微分方程式 IV" に掲載予定.
- [5] 岡本清郷-峰村勝弘, 対称空間上の境界値問題について, 数理研講究録 227 (1975), 70-74.
- [6] 大島利雄, 対称空間上の境界値問題について, 数理研講究録 "対称空間上の不変微分方程式" に掲載予定.
- [7] ———, 確定特異点型境界値問題について, 数理研講究録 "超函数と線型微分方程式 IV" に掲載予定.